

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：33801

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K10524

研究課題名(和文) 認知症ケアのための男性用介護レディネス尺度の開発と実証的研究

研究課題名(英文) Development and empirical study of male caregiver readiness scale for dementia care

研究代表者

長澤 久美子 (NAGASAWA, Kumiko)

常葉大学・健康科学部・教授

研究者番号：80516740

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：認知症ケアのための男性用介護レディネス尺度(RSDMC)の開発目的で、在宅で認知症家族の介護経験のある男性へのフォーカスグループインタビューの結果と先行研究を元に質問紙を作成した。40歳以上の介護未経験男性に調査し、その結果3因子(「情報収集の意欲」「介護の知識」「他者との交流」)20項目の尺度を開発した。その後、RSDMCを用いて介護未経験男性を対象に介護レディネスに関連した属性の特徴の調査をした。有意に高かった項目は、下位尺度「情報収集の意欲」では50歳以上の者、「介護の知識」は50歳以上の者、父親・母親共に80歳以上、同居要介護者の存在、「他者との交流」は学歴が大卒以上の者であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今後日本では、高齢者人口や認知症高齢者の更なる増加が推測され、それに伴い在宅で介護を行う男性の割合も増加が予測される。近年、男性の家事や介護に関する意識や態度は変化してはいるが、介護における虐待の割合など、依然として女性介護者に比べ高い。現在、男性対象の介護レディネス測定のための尺度は開発されていない。今回本研究で開発した「認知症ケアのための男性用介護レディネス尺度(RSDMC)」を活用することで、3因子(「情報収集の意欲」「介護の知識」「他者との交流」)の不足部分の強化や、明らかとなった男性の属性の傾向を加味した関わりなど、男性への在宅介護に関連する介護開始前からの準備への対応が可能となる。

研究成果の概要(英文)：Based on the results of focus group interviews with men who had experience caring for family with dementia at home and previous research, a questionnaire was created to develop the Readiness Scale of Dementia Care for Male Caregiver (RSDMC). The findings included three factors ("willingness to gather information," "caregiving knowledge," and "interaction with others"), and a 20-item scale was developed from the results of men 40 years old or older who had never cared for a family member with dementia at home. The RSDMC was then used to examine the attributes among men inexperienced in caregiving. Significantly high items were those who were 50 years old or older for "willingness to gather information," those who were 50 years old or older, those whose parents were both 80 years old or older, and those who had a caregiver who lived with them for "caregiving knowledge," and those who had a college degree or higher for "interaction with others."

研究分野：老年看護学

キーワード：認知症高齢者 在宅介護 男性介護者 介護準備

1. 研究開始当初の背景

高齢者人口の増加や認知症高齢者の増加、地域包括ケアシステムの推進等から、在宅療養高齢者が増加傾向にあり、それに伴い、在宅で介護を行う男性の割合も増加する傾向にある。家事や介護に慣れず、また弱音を吐かず介護を一人で抱え込みやすい男性介護者は、虐待や無理心中の割合も女性に比べ高い。そのため、介護に対する事前準備ができていれば、介護生活でのスムーズな対応やストレス軽減に結びつくと考え、その準備状況を測定するための「認知症ケアのための男性用介護レディネス尺度 (Readiness Scale of Dementia care for Male Caregiver)」(以下 RSDMC)を開発することとした。

2. 研究の目的

準備状況を測定するための「認知症ケアのための男性用介護レディネス尺度 (Readiness Scale of Dementia care for Male Caregiver)」(以下 RSDMC)を開発し、その尺度の実証的検証をすることである。

本研究における「レディネス」の定義 :

本研究においては、レディネスを「ある学習をする時に必要となる学習者の精神的・身体的準備状態のことであり、これ迄に得た知識や技術・経験・関心(興味)・規範などが統合されたもの」と定義する。

3. 研究の方法：以下に上記目的に沿ったそれぞれの研究目的・方法・結果を述べる。

1) 介護未経験男性に必要な認知症家族の介護生活における事前準備

(1) 目的：

介護未経験男性に必要な介護の事前準備の内容を明らかにする

(2) 方法：

A 県 B 市・C 市在住の認知症家族の介護経験のある男性 16 名に、「介護未経験男性に必要な認知症家族の介護に必要な事前準備は何か」のテーマで、フォーカスグループインタビュー(2 グループ：9 名、7 名)を行った。A 大学倫理審査委員会の承認を得ている。

(3) 結果：

研究協力者の男性介護者は、3 年以上の経験者が 13 名、年齢は 60 歳以上が 15 名であった。介護未経験男性に必要な介護の事前準備の内容は、【認知症の疾病理解】や【要介護者や介護者になる可能性の認識】の必要性、日常からの【知人や隣近所との相互交流】や【公的な社会資源の知識】を持つこと、普段からの【家族間の交流】や【日常からの家事の慣れ】の必要性、介護から気を紛らわすための【自己の感情コントロールの工夫】の必要性、の 7 カテゴリーが抽出された。

(4) 考察：

男性介護者の介護生活に伴う困難として、家事への負担や戸惑い・弱音を吐かず介護を一人で抱え込み易いこと、社会からの孤立感、認知症患者の介護ではやり場のない徒労感等の報告があり、今回の結果と関連した。

また、家族の望みを知る必要性や、認知症の罹患や介護を身近なこととして捉える必要性を含めた事前準備をすることで、いざという時にも戸惑いが少なく介護できると考えられ

た。この結果、および先行研究から、認知症家族を介護する男性用の介護レディネス尺度 (RSDMC) の質問紙を作成した。

2) 認知症ケアのための男性用介護レディネス尺度 (RSDMC) の開発とその信頼性と妥当性の検討

(1) 目的:

認知症ケアのための男性用の介護レディネス尺度 (RSDMC) を開発することである

(2) 方法:

在宅で認知症家族の介護経験のある男性へのフォーカスグループインタビューの結果と先行研究から、「認知症家族のための男性用介護レディネス尺度」開発のための質問 61 項目を作成した。プレテストとして、医療関係への就業経験がなく、在宅において認知症家族の介護未経験の男性 90 名に調査を行った。その結果から、質問項目の内容の再検討を行い、計 56 項目の質問紙を作成した。その後、医療・福祉関係以外の企業等に就業している、認知症家族の介護未経験男性 1790 名に自記式質問紙調査を行った。その結果、459 名 (25.6%) の回答を得た。分析対象は、有効回答数 408 名 (22.8%) のうち、40 歳以上の 295 名 (16.5%) と、Web で同様の質問紙調査を行い、回答のあった 40 歳以上の男性 115 名の計 410 名を分析対象とした。A 大学倫理審査委員会の承認を得ている。

(3) 結果・考察:

3 因子 20 項目が抽出された。負荷量の大きい項目で下位尺度を作成し、「他者との交流」「介護の知識」「情報収集の意欲」からなる RSDMC が明らかとなった。下位尺度 3 項目の Cronbach's α 係数は全て 0.8 以上であり、I-T 相関の結果と併せて内的整合性が確認された。また、再テスト法による級内相関係数では各下位尺度とも $r=0.8$ 以上であった。さらに、既成尺度とで基準関連妥当性 ($r=0.637$) が確認され、RSDMC は信頼性・妥当性を有していると判断した。

3) 介護未経験男性の在宅介護の事前準備に関する年齢比較

COVID-19 の蔓延により、当初計画の介護準備プログラムでの尺度の検証は中止し、前述「2.」の 40 歳未満のデータも活用し、事前準備の年齢比較の分析を行った。

(1) 目的:

介護未経験男性の在宅介護の事前準備に関する年齢による相違について明らかにすることである。

(2) 方法:

分析対象は、前述「2.」の対象と「2.」で調査した 40 歳未満の対象者のデータも含めた。A 県内の企業や公的機関で就業する介護未経験で、かつ医療福祉関連職でない男性 1790 名の有効回答数 403 名 (22.5%) と、WEB 調査会社の調査による 115 名の計 518 名である。分析は、記述統計を実施後、年齢ごとに Kruskal-Wallis 検定を行った。次に介護保険の第 2 号被保険者にに基づき 40 歳未満と 40 歳以上とで 2 分割し Mann-Whitney 検定を行った。A 大学倫理審査委員会の承認を得ている。

(3) 結果:

年齢割合は、18~39 歳・40 歳代・50 歳代でそれぞれ約 20~30% を占めていた。年齢ごとの Kruskal-Wallis 検定では、作成したアンケートで年齢別に有意差のあった項目を集約し、其々命名した。有意差のあった項目は、「介護や認知症に関連する知識」「介護や認知症に関

連する情報収集の姿勢」「介護への意識」「地域・友人・家族との交流」「家事の意識」であった。40歳未満と40歳以上との比較では、40歳以上で有意に高かった項目は「介護や認知症に関連する知識」「介護や認知症に関連する情報収集の姿勢」「地域・友人・家族との交流」「家事の意識(家事は女性役割等)」であった。40歳未満で有意に高かった項目は「地域・友人・家族との交流」「家事の意識(洗濯・食事の支度は可能等)」であった。

(4) 考察：

40歳以上の男性の「介護や認知症に関連する知識」「介護や認知症に関連する情報収集の姿勢」が有意に高い理由は、父母の介護を実感する年代であり意識して情報収集を行っている事など、意図的に介護準備をしていると推測できた。「地域・友人・家族との交流」では、年齢が高くなるにつれて関係は友人から地域の繋がりに移行する傾向が見られた。また、「家事の意識」が40歳未満で有意に高い理由は、家事に関連する社会意識の変化等が影響していると考えられた。今後介護の事前準備の支援として、年齢を加味した関わりや若い頃からの意図的な介護準備の意識化の必要性が明らかとなった。

4) 介護未経験男性の介護レディネスの属性の特徴-認知症ケアのための男性用介護レディネス尺度(RSDMC)を活用して

COVID-19の蔓延が治まらず、以前研究者が作成した「男性用介護準備プログラム」の実施による尺度検証は不可能であった。そのため、それぞれの属性の特徴により準備の傾向があるのではないかと考えた。個々の個別性はあるが、介護準備の傾向が明らかになることで、その特徴に合わせた事前準備の支援が可能となる。

(1) 目的：

RSDMCを活用し、介護に関連したレディネスの介護未経験男性の属性の特徴を明らかにすることである。

(2) 方法：

対象者は、医療・福祉関連の職業に従事した経験がなく、在宅で認知症家族の主介護者としての介護経験のないA県内の企業に就業する男性298名である。アンケート内容は、年齢・結婚の有無等の属性とRSDMC20項目である。分析は、年齢・結婚の有無・兄弟人数・同居家族人数・親の年齢・親との同居の有無・同居要介護者・最終学歴と、RSDMCの下位尺度「情報収集の意欲」「介護の知識」「他者との交流」の3項目で、記述統計・T検定・一元配置分散分析・二元配置分散分析を行った。A大学倫理審査委員会の承認を得ている。

(3) 結果：

対象者の年齢は40歳以上が59.1%、既婚者73.5%、家族4人以下は78.5%、父母の年齢70歳以上が54.2%、同居要介護者は5.1%、長男は64.8%、最終学歴は大卒以上が64.5%であった。有意差のあった項目は、下位尺度「情報収集の意欲」では50歳以上の対象者、「介護の知識」では50歳以上の対象者、父親・母親共に80歳以上、同居要介護者の存在、「他者との交流」では最終学歴であった。また対象者の年齢を10~60歳代で多重比較した結果、有意差は無かったが年齢の増加に伴い「情報収集の意欲」「介護の知識」は上昇し、「他者との交流」は減少した。更に未婚で独居または2人家族では「情報収集の意欲」が有意に高かった。また有意差はなかったが、未婚で年齢が50歳以上の対象者は「情報収集の意欲」や「介護の知識」は高まり、逆に「他者との交流」は減る傾向が見られた。

(4) 考察：

「情報収集の意欲」と「介護の知識」は、本人や親の年齢の上昇に伴い、介護の必要性の

実感から意図的に介護準備をしていることが推測できた。今後、日本の高齢化の更なる進展を見据え、男性介護者がスムーズに介護生活が営めるための介護準備や「他者との交流」の必要性などの情報提供について、若年からの意図的な教育システムの構築が必要であると思われた。

4. 研究成果

今後日本では、高齢者人口や認知症高齢者の更なる増加が推測されており、それに伴い在宅で介護を行う男性の割合も増加が予測される。近年、男性の家事や介護に関する意識や態度は少しずつ変化し、“男性だから”と一括りには捉えられない時代になっている。しかし、介護における虐待の割合など、依然として女性介護者に比べ高い。

そのため、男性が在宅介護生活始める前に知識や考え方などの介護準備ができることで、要介護者・介護者ともに自己の生活を大切に生活できるのではないかと考えは、研究開始前と同様である。

本研究においては、男性の介護準備状況を測定するための3因子(「他者との交流」「介護の知識」「情報収集の意欲」) 20項目からなる「認知症ケアのための男性用介護レディネス尺度(Readiness Scale of Dementia care for Male Caregiver)」(以下 RSDMC)を開発した。内的整合性・基準関連妥当性が確認され、RSDMCは信頼性・妥当性を有していると判断した。

また今回、COVID-19の蔓延でRSDMCの実証的研究はできなかったため、介護未経験男性の介護レディネスに関連する属性の特徴を明らかにした。

今後、本研究で開発したRSDMCを活用することで、3因子(「情報収集の意欲」「介護の知識」「他者との交流」)の不足部分の強化や、明らかとなった男性の属性の傾向を加味した関わりなど、男性への在宅介護に関連する介護開始前からの準備への対応が可能となる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 長澤久美子、山村江美子、吉田哲也、伊東明子、千葉のり子、岩清水伴美	4. 巻 9
2. 論文標題 認知症ケアのための男性用介護レディネス尺度の開発	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 常葉大学健康科学部研究報告集	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長澤久美子、山村江美子、千葉のり子	4. 巻 26
2. 論文標題 介護未経験男性に必要な認知症家族の介護生活に関する事前準備	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 家族看護学研究	6. 最初と最後の頁 47-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 長澤久美子、長澤久美子、西川浩昭、山村江美子、吉田哲也、伊東明子、千葉のり子、岩清水伴美
2. 発表標題 認知症ケアのための男性用介護レディネス尺度の開発
3. 学会等名 第40回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 長澤久美子、山村江美子、千葉のり子
2. 発表標題 介護未経験男性に必要な認知症家族の介護生活に関する事前準備について - 認知症家族の介護を行う男性介護者の経験から -
3. 学会等名 日本家族看護学会学 第26回学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長澤久美子、山村江美子、千葉のり子
2. 発表標題 介護未経験男性の在宅介護の事前準備に関する年齢比較
3. 学会等名 日本家族看護学会学 第29回学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 長澤久美子、千葉のり子、山村江美子
2. 発表標題 介護未経験男性の介護レディネスの属性の特徴 -認知症ケアのための男性用介護レディネス尺度 (RSDMC)を活用して-
3. 学会等名 日本家族看護学会学 第30回学術集会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	岩清水 伴美 (Iwashimizu Tomomi) (60516748)	順天堂大学・保健看護学部・教授 (32620)	
研究分担者	千葉 のり子 (Tiba Noriko) (70737353)	常葉大学・健康科学部・准教授 (33801)	
研究分担者	山村 江美子 (Yamamura Emiko) (90340116)	聖隷クリストファー大学・看護学部・教授 (33804)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	伊東 明子 (Ito Akiko) (10308687)	常葉大学・教育学部・教授 (33801)	
研究分担者	吉田 哲也 (Yoshida Tetsuya) (70323235)	常葉大学・教育学部・教授 (33801)	
研究分担者	西川 浩昭 (Nishikawa Hiroaki) (30208160)	聖隷クリストファー大学・看護学部・教授 (33804)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関